

講演論文

## しあわせな馬がしあわせをつくる —介在馬の管理とトレーニング—

中川美和子\*

一般社団法人ヨナグニウマ保護活用協会

### Happy Horses Make People Happy

NAKAGAWA Miwako\*

Yonaguni Pony Society

#### はじめに

「介在馬」という言葉、なかなか聞きなれない、違和感のある言葉ですが、ここでは、馬介在教育や療法で活躍する馬、という意味で使っています。

最近では、いわゆる「ホースセラピー」という言葉が普及したのか、ホースセラピーをやりたい、という方も増えてきているように感じます。特に、私がいる沖縄はつい最近まで馬や馬車を使ってきた歴史もあり、今でも趣味で馬を飼っている方が比較的多い土地柄です。そうした方々から、馬を飼っているから、あるいは知り合いが馬を譲ってくれるからホースセラピーをやりたい、やり方を教えて、という相談を受けることがしばしばあります。しかしながら、そんな方々が飼っている馬を見に行くと、ホースセラピー以前の課題がたくさんある状況が見えてくるのです。

#### どんな馬でも「介在馬」になれる？

結論から言うと、「なれません」。動物介在教育も療法も、突き詰めていけば人間の「しあわせ」をつくるための方法論の一つだと考えています。人間のしあわせをつくる馬は、馬自身がしあわせでないといけない、というのが私たちの考えです。なぜならば、しあわせでない馬にはストレスがあり、ストレスがある馬は人に危険を及ぼす可能性があるからです（それは人間に関しても同じですよ）。

#### 馬の「しあわせ」とは何？

では、馬のしあわせとは何でしょう？ もちろん馬に聞いてみるわけにはいかないのです、彼らがどう考えているのか（そもそも考えるのか）はわかりません。



図 1 ストレスがない馬は子供にも寛容

人間が考える「馬のしあわせ」という視点からいうと、人と同じく「衣食住」が大切ではないかと私たちは考えています。そして、馬に対する人からの最大の、そして精一杯の愛情表現は、彼らの性質に配慮しながら衣食住を整えてあげることだと思うのです。

#### しあわせな馬の「衣食住」とは？

馬と言えば馬小屋、がまずは思い浮かぶかと思いますが、でも、私たちの馬、ヨナグニウマの故郷・与那国島の馬たちには、みなさんが想像するような馬小屋はありません。代わりにあるのは、広い草原とトゲトゲの植物・アダンの林。彼らは広い草原で自由に採食し、アダンの陰に隠れて台風の強い雨風や刺すような太陽の日差しをやり過ごします。島の自然環境は本土と比べると想像をはるかに超える厳しさですが、そこには何より自由に動いて好きな時に好きな草を食べられるというしあわせがあります。

馬は本来、自由に動ける空間で美味しい草を求めて

\* 連絡先: umikazehf@yahoo.co.jp (〒 901-1412 沖縄県南城市佐敷新里 1688 ユインチホテル南城うみかぜホースファーム内)



図2 広い放牧地でくつろぐヨナグニウマ



図3 子供と馬のしあわせなひととき

長い距離を移動しながら生きてきた動物です。私たちもできるだけこの環境に近い暮らしを実現させようと心がけており、放牧地と、自由に出入りができる馬小屋をセットにして飼養環境を整えています。馬小屋はあれど、そこに閉じ込めるのではなく、好きな時間に(猫のように)馬自身が最も心地よく感じる場所を選べるようにしています。

「食」の部分では、馬が一番好きな青草をメインで与えるようにしており、毎日の草刈りがスタッフの日課です。トラックに山盛りの草を刈って放牧地のあちこちに青草の小山を置き、草原での自由採食に少しでも近づけるようにしています。草は、栽培している採草地の牧草もあれば、公園など雑多な草が生えているところから刈ってくることもあります。雑多な草には多様な成分が含まれているので、馬たちは体調や好みに応じて好きな草を選んで食べています。この給餌方法は栄養管理という点では少し劣るかもしれませんが、人の労力は相当かかるため効率が良いとはお世辞にも言えません。が、なにより食べたい草を食べたい時に食べられるという馬のしあわせのことを考えると、やはりここは譲れないのです。

そして最後に「衣」。馬はさすがに洋服は着ませんが、乗馬やホースセラピーで活躍する馬は馬具という「衣」を身に付けます。ヨナグニウマの場合は少し特殊な体型なのでなかなか合う鞍がないのですが、サドルフィッティングなどを勉強しクッションなどを工夫することで馬になるべく負担がないような装鞍を日々模索しています。

### 「介在馬」になるまで

前述した「ホースセラピーをやりたい」という方たちは、みなさん様に馬は生まれながらにして人間を背中に乗せてくれる、とあっていらっしやいます。それが本当なら夢のような話ですが、残念ながらそうではありません。何も訓練を受けていない馬は、背中に何かを乗せただけで飛び上がって逃げてしまいます。そこで、例えば乗馬を伴うホースセラピーの場合は背中に人を乗せるトレーニングをするわけですが、これにも様々なやり方があります。

ほんの数十年前まで、人は恐怖と力で馬を支配し、言うことを聞かせていました。ここ沖縄でも、子供のころに馬を家で飼っていたという50代以上の方たちは、「馬を木に縛って涙を流すまで馬を殴れ、そうすれば言うことをきく」と親から教えられたとおっしゃいます。当時、人間より大きく力のある動物を扱って日々の仕事をするにはそうする他はなかったのでしょう。でも、このやり方では馬もちろん不幸だし、人間にとっても危険が伴います。幸い、今では馬の性質を観察し、それを活かしたナチュラルホースマンシップというトレーニング法があり、私たちもずいぶんここから学んでいます。

そしてトレーニング以前に大事なものは、馬との信頼関係の構築です。トレーニング法を知らなくても、馬の「衣食住」を馬の性質になるべく合うように整え、日々、馬においしいゴハンをあげてブラシをかけてあげるだけで、馬はストレスなく、満ち足りて、「介在馬」への第一歩を踏み出すことができます。こうして「馬のしあわせ」を日々考えることが、人のしあわせにもつながってくるのです。